

東日本大震災 現地で支援活動をしてきました

東日本大震災被災地支援のため多久市職員を派遣（5月26日まで6人）しています。「佐賀きずなプロジェクト」派遣事業で、避難所運営支援にあたった藤井職員と保健師として支援にあたった菊池職員がその報告をします。市では、支援要請により、今後も職員の派遣を予定しています。



総合政策課
藤井康輔 職員
（4月5日～12日まで
宮城県気仙沼市で活動）

私は約80人が避難している松岩小学校に派遣され、教室で寝泊りし、物資の仕分けや配食など避難所の運営業務を行いました。食料はおにぎりやパンなどの炭水化物が主で、栄養のバランスに問題を感じました。避難所の学校は、再開に向けた準備が進められており、学校への負担をかけないよう避難者は自主的な話し合いを行ったり、施設の清掃や配食作業なども、避難者の協力が積極的な避難所でした。

気仙沼市は平地が少なく、津波や火災で壊滅状態。避難所から300mほど下ると、突如としてガレキ一面の状態で、ヘド口の混じりあったような臭気がありました。派遣中も強い余震により電気・水道が停止し、まだまだ予断を許さない状況でした。水道や電気の必要性を改めて認識。特に飲み水としてだけでなく、うがい・手洗いといった衛生的な面でも、水の必要性を感じました。今、最も必要なのは住宅で、仮設住宅の早急な建設が望まれ、事務的な支援も必要と感じました。



健康増進課
菊池伊津子 職員
（4月14日～20日まで
宮城県多賀城市で活動）

私は避難所の健康相談と被災地区の家庭訪問を行い、健康状態の確認や余震に備えての対応などの聞き取り調査を行いました。

避難所の文化センターでは、500人以上もおられ、一人ひとりに声を掛け健康状態を確認することから始めました。1月経った頃で、避難所生活の疲れも加わり、身体的にも血圧が上がって来たり、便秘を起こしたり、かぜを繰り返したり多くの課題がでてきました。食事もおにぎりやパンの炭水化物が主で、栄養のバランスが取れにくい現状が継続。4月の余震で、断水となっており、洗面やトイレなど生活する上で不便な状況でした。その大変な状況の中で、私が声をかけると、「ありがとうね」「遠くから来てくれたね」などと、逆にやさしい声を返していただいて、人のかかわり、人の優しさを感じることも多かったです。その場に居合わせた人々で協力して身体をいたわりあう場面なども見受けました。

家庭訪問では、人口62,000人、24,540世帯のうち、約4分の1である6,400世帯が被災。各戸を回り、今の生活状況や健康面などお話を伺ううちに、今回の怖さ・今の不安さを話しながら、涙を流され一緒に涙することも多かったです。住み慣れた土地で仲間と暮らせる楽しさはもっとも大切なことだと感じました。

市長コラム

温 | 故 | 創 | 新

Message for citizen

「わしがやらねば誰がやる」

～晩節を汚さぬ生き方～

市長 横尾俊彦

5月の九州市長会では、佐賀県市長会等の提案で、原発の安全対策と被災地復興の緊急決議を行った。あわせてメタンハイドレードなどの新エネルギー政策充実を国に求める意見も出した。

開催地の吉岐市には「電力の鬼」とも称された松永安左工門翁の生家と記念館がある。明治8年生まれで明治・大正・昭和の三代にわたり、電力の普及と振興に尽力し、日本の産業経済発展の基礎を築き活躍した人物だ。シンクタンクもつくり、政府へ政策提案し、実行に活躍した偉才である。

その遺言状は有名。「死後の計らいの事」で始まる。「死後一切の葬儀・法要はうすくの出るほど嫌いにはれあり。墓碑一切、法要一切が不要。線香類も嫌い。死んで勲章位階（もとより誰もくれまいが友人の政治家が勘違いで尽力する不心得、かたく禁物）これはヘドが出る程嫌いに候。財産はセガレおよび遺族に一切くられてはいかぬ。彼らがダラクするだけです。（中略）：借金はないはずだ。戒名も要らぬ。」と続く。痛快で明快。かの白洲次郎にも影響を与えたと館長に聞いた。

慶應義塾では直接薫陶を受けた福澤諭吉先生の記念帳に「我が人生は闘争なり」と書し、九十六歳天寿全うまで現役の活躍。トインビーの名著『歴史の研究』翻訳にも最期まで尽力した。翁は「今やらねばいつ出来る。わしがやらねば誰がやる」の気迫で人生街道を突き進んだ。

同じ気迫の生涯をもつ多久の先覚者・高取伊好翁の銅像が再建立された。二大巨星は晩節を汚さぬ生き様を貫き、人生の原則と信念が光る。